

JumpUP アマネ

ふくおかケアマネ情報

2020.4発行

Vol. 45

発行所

(公社)福岡県介護支援専門員協会
(日本介護支援専門員協会福岡県支部)

住所/〒812-0016

福岡市博多区博多駅南2丁目9-30

福岡県メディカルセンタービル2階

TEL.092-431-4585 FAX.092-431-4577

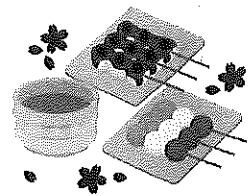
E-mail: fukuokacm@tune.ocn.ne.jp

<http://fukuoka-cm.jp>





◆◇◆◇◆◇ 目 次 ◆◇◆◇◆◇



1. 第4回福岡県介護支援専門員協会 研究大会 P 3
2. 他職種連携研修 P 13
3. 日本介護支援専門員協会メルマガ等からの最新情報 P 23
4. ケアマネ相談窓口のお知らせ P 29
5. 様式集 P 31
6. 倫理綱領 P 37
7. 編集後記 P 39

表紙から

先月、日本介護支援専門員協会、九州・沖縄ブロック研究大会in鹿児島に参加した時の桜島の写真です。

高さ1,117m(北岳・御岳)、面積約80km²、周囲約52km。北岳・南岳の2つの主峰から成る複合火山です。名称の由来は諸説あるようですが、噴火により海面に一葉の桜の花が浮かんで桜島ができたという伝説(『甕藩名勝考』)が最も県民に知られているそうです。

特産品として、かぶを大きくしたような世界一大きい大根「桜島大根」と、世界一小さなみかん「桜島小みかん」があります。降灰の被害もあるでしょうが、農産物や温泉、壮大な景観など火山の恵みもあり、多くの方が暮らしています。

あつ来年の研究大会は沖縄県ですよ。

(担当S)

第4回 福岡県介護支援専門員協会研究大会

大会テーマ

つなぐ・つなげる・つながる

～ connect our hearts together ～

～ 誰のための 何のための ケアマネジャーか? ～

日時:令和元年12月14日(土)13:00～17:20

会場:FFGホール 大ホール(福岡市中央区天神2丁目13番1号)

主催:公益社団法人 福岡県介護支援専門員協会

大会プログラム

座長:江上 文幸 氏(福岡県介護支援専門員協会 副会長)

助言者:衣笠 一茂 氏

(1) 演題発表

①「認知症の妻の思いと命がけで介護する夫の思いをつなぐ多職種チームケア

～在宅限界を高める意思決定支援について考える～

香住ヶ丘ケアプランセンター 永田 敦子 氏

②「高齢者の外出移動手段に関する調査結果

～田川市の主任介護支援専門員の取り組みから～

田川市地域包括支援センター 太田 良子 氏

③「地域ケア会議における介護支援専門員の資質向上に関する報告

～居宅介護支援事業所へのアンケート調査から～

福岡県介護支援専門員協会 総務部会

倫理・人権擁護委員会委員 林田 宗大 氏

④「実地指導を受けた居宅介護支援事業所の現状と課題についての報告

～居宅介護支援事業所へのアンケート調査から～

福岡県介護支援専門員協会 総務部会

倫理・人権擁護委員会委員 大平 ひとみ 氏

(2) 基調講演

演題:「研究をするとはどういうことか?」

講師:衣笠 一茂 氏

(3) 日本介護支援専門員協会活動報告

日本介護支援専門員協会 会長 柴口 里則 氏



参加人数:136名

福岡県介護支援専門員協会研究大会に参加して

福岡支部
森下 茂子

居宅の介護支援専門員から、認知症になりBPSD症状のある妻を、命がけで介護される夫のケースに、つなぐ生活シートを活用してよい変化がみられた研究発表がありました。

夫ができていないこと、頑張っておられることを見える化して、夫が自信や肯定感が持てるように支援されたこと、多職種で情報共有して支えることで、辛さや不安を打ち明けられる理解者が居ると感じるように夫の気持ちに変化していったこと、また妻のBPSD症状の改善、夫婦の関係の修復、本人・家族を含む多職種チームケアを形成され、生きがいや喜びが明確になるまでの変化を支援する過程は、心強く感動的で、発表を聞く側も勇気づけられました。

発表を聞いて、介護者が他人に話す余裕がないくらい疲労している段階からの介入は、支援者側も精神的な疲労があったのではと思います。関わり方による変化を理論的に話せる技術も教わる素晴らしい発表でした。

地域包括支援センターの主任介護支援専門員から、移動手段がなくて困っている高齢者が多いという声を発端に、高齢者のみの410世帯に直接聞き取る方法でアンケート調査をして、地域にどのようなサービスが不足しているか、コミュニティバスが日常的な移動手段として機能していない実態を把握して、地域課題として市に発信した研究発表がありました。

数年前に主任介護支援専門員の役割のひとつに地域課題の発見や発信があると初めて聞いた時、そんな壮大なことができるのかなと驚いたこと、荷が重いと感じたことを思い出しました。

現状を丁寧に把握されているから根拠のある発言として発信ができること、先陣きって取り組まれている包括の活動・行動力を知る機会はとてもよい刺激になりました。

多くの介護支援専門員が、介護保険の事業者として関わるだけではなく、利用者や家族の望む暮らしは何なのか、どう生きたいのか、一緒に考える関わりをするように変わってきたとほんやり感じているだけでしたが、講師から、介護支援専門員とは専門的な知識や技術だけではなく、主観や感覚を扱う仕事、価値基準の専門職だと表現して頂きました。専門的な価値基準を確立するためには、科学的な根拠で必要性を言葉にして伝えることが出来るようにならなければいけない、言葉にする勉強をしないといけないという助言が、意識に響きました。

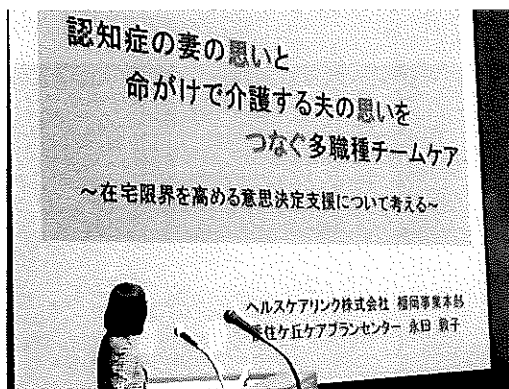
自分が働く地域で、私は何ができるのか、何のために関わっているのか、考えるきっかけになるとても有意義な研修でした。

事例研究発表を通して、気づいたこと ～本人や家族の想いに耳を傾ける～

香住ヶ丘ケアプランセンター
永田 敦子

私が事例発表しようと思ったきっかけは、大会テーマ「誰のための何のためのケアマネジャーか?」というタイトルが、自分の思いをつなげてくれたような気がします。

抄録・発表資料作成、事例発表を通して、焦点化、言語化、プレゼンテーション力の難しさを痛感するとともに、事例に向き合うことで見えてくる利用者本人や家族の想いに気づくことができました。日々の生活の中で、私たちは常に自己決定しています。認知症の進行などにより、本人の意思確認が困難な場合、誰の決定で支援していくべきか迷うことがあります。そんな時、表情やボディランゲージ、生活史、価値観などに寄り添い、介護者と一緒に本人の想いを想起するプロセスを通して本人を理解し、生きる喜びにつなげる多職種チームケアを実践できるケアマネジャーとしての役割を果たしていきたいと思います。今回、発表の機会をいただいた福岡県介護支援専門員協会の皆様、そして事例のAさんご夫婦と多職種チームメンバーに感謝を捧げたいと思います。



研究大会の感想

太田 良子

今回の研究大会では、介護支援専門員の多くが感じている「高齢者の外出手段に関する課題」について、行政への問題提起することを目的に、地域包括支援センター所属の主任介護支援専門員として、市内事業所の主任介護支援専門員らと共に取り組んだ調査とその成果について発表しました。不慣れな発表でしたが、衣笠先生からは「研究が支援そのものになっている」と勇気をいただき、今後に弾みがつく思いがしました。「研究とは何か」という今回の学びを活かし、今後、現場の身近な課題について、より踏み込んだ考えを持ち、説明できる専門職になれたらと思っています。大変貴重な機会をいただき有難うございました。

